



## 保育士不足に思うこと



理事 土屋 みどり

私が保育士として就職した昭和52年4月、初任給は8万円（手取り）でした。その時、保育園で働く職員の中に保育士（当時は「保母」）資格を持つ職員は少なく、ちょうど資格を取ったばかりの若い保育士が多数雇用され、先輩にあたる人たちの3分の1の方は保育士資格がなく、毎年国家試験を受けて職場に生き残るといった時代の変貌に加えて、第2次ベビーブーム（昭和46年から50年）の終わりごろで、子どもの人数も多く幼児クラスの担当は20名から30名を1人で保育、隣のクラスまで合わせて保育するなどは当たり前のことでした。

好きな仕事はやりがいがあるが、新任の私には毎日楽しいことばかりでなかったのは事実でした。保育の道をこころざしたのは、「お世話になったあの先生のようにになりたい」、ただそれだけのことでしたが、私にとって保育園の仕事は、命を預かっているという責任に加え、子どもからの愛情に救われ頑張れる職業でありました。

子どもたちにとって不安ばかりの入園の4月、そんなときは優しく抱きしめて「大丈夫だよ」と声をかけ、保育士の腕に抱かれて安心して眠る幼子、あんよが出来るようになると保育士にかけより愛くるしい笑顔を見せてくれる。そんな大切な乳幼児期、子育てのお手伝いをする。時がたつのはあっという間で、心身ともに大きく成長した年長児を送り出す卒園の時、保育士でよかったと思える瞬間でした。

保育園は今も昔も変わらない、そう思いたいのですが、今の保育事情はどうでしょうか。保育士の仕事はこんなに素晴らしい職業なのに、保育制度が変わり、子どもと関わっている時間だけが仕事ではないのは勿論のこと、子どもの命を預かるという責任に加え、保護者の就業の多様化にともない、延長保育の対応や、自分中心のかつ理不尽な要求をする保護者の増加、さらには子どもの食物アレルギー対応など仕事は増える一方です。保育士不足の現状を思い浮かべたとき、責任の重さや、労働条件に報酬は見合っているのでしょうか。就業時間を減らして働きやすさを改善していくなど、柔軟な働き方が出来るようにしていくことが課題となっています。

一方、保育士資格を取得しながら、保育士資格を持ちながら保育業務に就かないのはどうしてなのでしょう。「保育士」はいるのに、「保育士として働く人」が足りない。保育士への道は決して簡単なものではなかったはず、なぜ保育の仕事に就かずに将来の夢をあきらめてしまうのか。保育士としての専門職の今後が労働環境の見なおしにより、「保育士の未来像がもっともっと明るくなりますように」と願う今日このごろです。